歴史遺産を活用した都市計画についての研究

中国の曲阜市と日本の熊本市におけるサインシステムの構築に関する研究

The research of practical urban planning in archeological places

張　伊　欣
Yixin ZHANG

崇城大学大学院芸術研究科デザイン専攻
Division of Design, Graduate School of Art, Sojo University

曲阜市中心部（サイン調査）エリア

案内サイン

説明サイン

タッチパネルサイン

誘導サイン

規制サイン

三孔内に設置されているサイン

（図）調査エリア

曲阜市は中国山東省に位置する64万人の地方都市である。孔子の生地として世界に知られている。近年、新しい鉄道駅とバスターミナルができたが、充分なサイン計画がされておらず、駅から三孔（曲阜市にある孔子ゆかりの建物、すなわち孔子廟、孔子府、孔子林のこと。世界遺産に登録されている）までの動線の整備が遅れており、混乱状態となっている。

以上から本研究では、当該地域の問題を抽出し、環境を提案することを目的としている。

本研究では、日本の熊本市の熊本城および中心部のサイン配置と中国の曲阜市の三孔および中心部のサイン配置を取り上げ、歩行者ルート上の交通拠点（バスターミナル、鉄道駅）から観光地までのサインの分布状況について調査した。

調査によると熊本城周辺にはサインが約117個あり、熊本城から他の施設への移動や他の施設間の移動もわかりやすい。熊本城周辺案内サインの利点として、歩行者用の案内サインが大量に置いてあり、常に目につくため、安心して移動することができる。一方、曲阜市のサインを調査してみると、市街地には通り名サインしかなく、三孔に関する資料、情報、案内がほぼない状況であり、とても不便である。三孔の中には、169個のサインが設置されている。サインの本体デザインは歴史モチーフを用いたデザインで統一されており、誘導、案内、規制、説明、タッチパネルの５種類がある。個数は多いが、内容的には不十分である。例えば地図の内容が城内に限られており、三孔周辺の状況がわかりにくい。また、設置される場所に関わらず同じ地図を使用しているため、向きが正対しない場合もあり、現在地の表示もないため、自分がいる場所がわかりにくい。

国際的に価値が認められた歴史遺産は外国からの観光客も多く訪れるため、案内サインも外国語対応が求められる。これらの対応には携帯電話を利用した観光案内やタッチパネル方式電子サインなど情報機器を活用した案内サインが増えつつある。こういったサインは提供できる情報量が多く、手軽に使えるし個人のニーズに合わせた情報提供が可能になるという利点がある。しかし、技術的な課題も多く、コンテンツの不足も問題である。時代発展とともに、多様なサインを活用して、的確な案内を行う必要がある。